富山県俳句連盟会報

第 83 号
平成二十八年十二月一日発行
富山市安住町二―一四
〒930-0094 電話 〇五六-四四五-二四三三
振替番号 金沢 五―一七一〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

第六十五回 富山県芸術祭主催
第二十回 富山県民芸術文化祭参加
秋季俳句大会
佐藤武彦先生の講演を聴く

富山県芸術祭主催並びに富山県民芸術文化祭参加の秋季俳句大会は朝からの雨も上り十月一日（土）午後一時から、北日本新聞ホールにて、百二十名の参加を得、開催された。坂田直彦幹事司会のもと中坪達哉会長が、俳句に関わっていない人達にも感動してもらえる作品を詠み、俳句の裾野を拡げましょうと挨拶。

続いて、県ナチュラリスト協会参与、立山散策案内人、佐藤武彦先生を講師に迎え「山・人・自然―越中の風土に学ぶ―」という演題で、レジメをもとに講演を聞く。（講演要旨は別掲）

小憩後、俳句大会に入る。すでに出句されている六七八句（三三九名）について、連盟役員に選考された特選句、入賞句を田村京子、野中多佳子両幹事より発表。

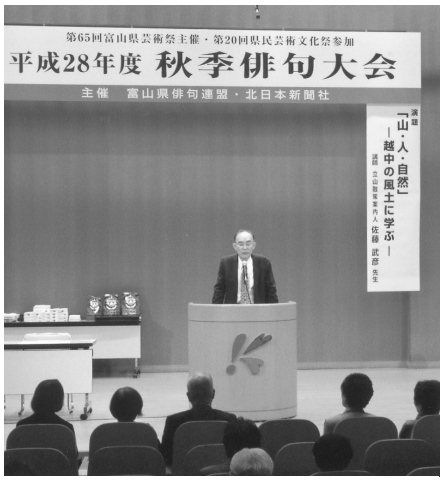
そのあと理事の八尾とおる、浜谷栄子、高木昭夫、牧長幸子、白井重之各氏から選評を受ける。

引き続き表彰式に移り、寺田幹北日本新聞社文化部長より北日本新聞社賞、中坪達哉会長より連盟賞をそれぞれに贈呈された。（成績は別掲）

石工冬青副会長が閉会の辞を述べ大会は盛会裡に終了。

尚、当日、連盟合同句集（第四十一集）を発刊し、配布した。

又、北日本新聞社主催の「越中賛歌」作品（投句数三三四句）の入賞百句は北日本新聞十月二十日付け朝刊に掲載され、発表となった。



挨拶の中坪達哉会長

連盟夏季吟行会
庄川生涯学習センター

七月二十四日（日）夏季吟行会を開催。庄川生涯学習センター（砺波市庄川町青島）多目的ホールを会場に炎暑の庄川水記念公園や庄川大仏、合口ダムなどを吟行。なお庄川美術館館長、松村樹氏を講師に迎える。

演題は「浅野総一郎と庄川流域の変貌」

二句投句のあと連盟役員が選句し上位入賞作品を発表。参加者百名

天　位
ダム渡る風に切り込む夏つばめ
野村　邦翠

地　位
散居村青田浄土と申すべく　北川　越草

人　位
炎昼や光る器となるダム湖　杉本　恵子

富山県現代俳句協会
秋季吟行俳句大会

九月四日（日）富山市呉羽公民館を会場に、森家、旧北陸道町並み等を吟行し、俳句大会を開催。参加者三十五名で二句投句。

天　位
旧街道歩けばぐんぐん秋になる
白井　重之

地　位
塔あれば大きな秋を見に昇る
大久保置箔

人　位
秋暑し風に帆となる長暖簾　高木　昭夫

十一月十二日（土）同協会の第十一回ジュニア俳句大会を開催。県教育文化会館にて優秀作品四七句を表彰。投句数三十九校一、九三六句　当日保護者を含め百三十名参加。

富山県知事賞
くつひもは強めに結ぶ春の朝
氷見市立朝日丘小六　釣井　海聖

富山県教育委員会賞
しゃぼん玉うつる景色は無重力
高岡市立高岡西部中三　橘　咲良

平成二十九年度
総会・俳句大会（予告）

とき　平成二十九年六月三日（土）
ところ　北日本新聞ホール
講　師　「らん」発行人
鳴戸　奈菜　先生
（詳細は追って発表）

秋季俳句大会作品抄

◇連盟選者特選句

義信選
灯ともせば流すほかなし流灯会　室井千鶴子
百年の棟木涼しき高さかな　小澤　美子

順子選
秋耕の鍬に重たき昭和棲む　八尾とおる
花野きて歌となりゆく子らのこゑ　野村美智子

冬青選
曼殊沙華地球に割れ目あるといふ　平井　弘美

英子選
水遊び見てゐて昔見てをりぬ　稲田　節子

玲子選
常闇の祠涼しき厳かな　押見南美子

置箔選
黄楊刈つて夫婦涼しく老いにけり　四宮　一子

康裕選
我が家より施設に慣れて生身魂　北村加代子

久惠選
大賀蓮古代の時空手繰り寄す　寺田　嶺子

城子選
手を合はす事より始む風の盆　谷口萬里子

ゆう子選
熱気球ふはり散居の秋うごく　田村　浩美

弥生選
流鏑馬の馬冷されし木下闇　角田　睦子

富美子選
裸子のどこもかしこもまんまるく　久﨑富美子

美智子選
取る仕草しての挨拶夏帽子　村山　志水

洋子選
熱気球ふはり散居の秋うごく　田村　浩美

直彦選
簾戸入れてみな美しき影を持ち　丸田美恵子

一子選
青萩の忌中の紙の吹かれをり　田井三重子

春美選
蚊遣火や戦争のこと疎開のこと　片桐　久惠

重之選
一刷の雲新涼の海均す　田中　憲子

吉章選
背負い切れぬもの降り落とせ柿の花　山口ミイ子

桂子選
駄菓子屋のラムネが幅を利かせをり　西口　鶴子

恵子選
病む母と団扇の風を分かち合ふ　酒井きよみ

圭二選
玉子かけごはん掻き込む炎暑かな　島田おたか

昭夫選
取る仕草しての挨拶夏帽子　村山　志水

眞知子選
普羅の句をこころに日々を水打つて　関　昌子

寿山選
初蝶に逢いし余生の功徳かな　吉見　啓子

長穂選
山の日や仰ぐ立山あるくらし　五十里眞紀

徳子選
八月や日の丸いろの日が昇る　五箇　洋子

京子選
親と子の違ふ月日や草の花　二俣れい子

三久選
彼岸花逝くも生きるも紙一重　中島　黎子

達哉選
背負い切れぬもの降り落とせ柿の花　山口ミイ子

宗承選
旅支度てぶらでよろし天の川　濱元　旭子

敏子選
夏暖簾奥に慎ましまどゐかな　寺田　嶺子

真理子選
踊りぬき母は夜明けの水を呑む　堀井　国乃

美知子選
熱気球ふはり散居の秋うごく　田村　浩美

多佳子選
一隅を虫に残して草取れり　吉野　恭子

栄子選
捕虫網父が夢中になつてをり　成重佐伊子

幸子選
家を継ぐ継がぬは自由つくつくし　北村加代子

賢選
信号に気勢休ませ神輿かな　成瀬　輝代

千鶴子選
山の日や仰ぐ立山あるくらし　五十里眞紀

稔選
合歓咲くや一番星の出る辺り　中　静子

とおる選
男には男の作法白絣　中尾　三久

白羊選

◇入賞句

天位⑩　熱気球ふはり散居の秋うごく　田村　浩美
地位⑨　茄子焼いて私じつくり生きてゐる　川上　弥生
人位⑨　何はさて母ゐてこその盆帰省　脇坂琉美子
4位⑧　秋耕の鍬に重たき昭和棲む　八尾とおる
〃⑧　灯ともせば流すほかなし流灯会　室井千鶴子
〃⑧　男には男の作法白絣　中尾　三久
〃⑧　病む母と団扇の風を分かち合ふ　酒井きよみ
〃⑧　ふるさとは水より暮れて星涼し　神田　邦子
5位⑦　来る頃と二度目の水を打ちにけり　浅尾　京子
〃⑦　マネキンの横顔つんと更衣　野中多佳子
〃⑦　寝ころんで話すふるさと星月夜　浅野　義信
〃⑦　声かけて洗ふ子の墓夫の墓　大坪沙智子
6位⑥　海見ゆることも一品夏料理　有澤　嘉晃
〃⑥　僧を待つ常より多き水打ちて　飛田雪貌子
〃⑥　夕立去る怒って笑って母介護　西田　道代
〃⑥　捕虫網父が夢中になつてをり　成重佐伊子
〃⑥　簾戸入れてみな美しき影を持ち　丸田美恵子
〃⑥　裸子のどこもかしこもまんまるく　久﨑富美子
〃⑥　草の実や子に招かれる秘密基地　広川　峯子
〃⑥　百年の棟木涼しき高さかな　小澤　美子
〃⑥　山の日や仰ぐ立山あるくらし　五十里眞紀
〃⑥　微笑も言葉のひとつ吾亦紅　本間　篤子
〃⑥　明日帰る子等深眠り胡瓜揉む　般林　雅子
6位⑥　水遊び見てゐて昔見てをりぬ　稲田　節子
〃⑥　我が家より施設に慣れて生身魂　北村加代子
7位⑤　ゼリー菓子掬えばどこか恋に似て　浅尾　京子
〃⑤　倶利伽羅の谷に草矢を放ちけり　但田　長穂
〃⑤　雨蛙跳んで空き缶収集日　島田おたか
〃⑤　悪童のおおかた逝きし夕焼かな　新保　吉章
〃⑤　生え初めし歯に噛まれたる涼しさよ　源通ゆきみ
〃⑤　あくまでもこだわる地酒生身魂　坂本　昌恵
〃⑤　背負い切れぬもの降り落とせ柿の花　山口ミイ子
〃⑤　漱石にもたるるヘッセ曝書かな　森　純子
〃⑤　手枕の父へ一すじ蚊遣香　藤井　詩耕
〃⑤　帰り来てつくつくぼうしの中にゐる　中田　広美
〃⑤　炎天を来し顔乗せて電車発つ　吉田　泰子
〃⑤　手を合はす事より始む風の盆　谷口萬里子
〃⑤　死ぬほどの恋知らぬなり桜桃忌　初山　昭三
〃⑤　いくたびも水打ち子等を待ちにけり　布本美知子
〃⑤　ひと節は恋に転じて風の盆　水木　柳子
〃⑤　山百合の触るるを拒む白さかな　石黒　順子
〃⑤　炎天に黙す雨乞ひ石一つ　金盛　江美

「越中讃歌」（食）高点上位入賞作品

辛口の越の地酒や夜の秋　青木　和枝
大岩の山雨すぐ止む心太　関　昌子
夏料理母が育てしものばかり　金盛　江美

句集ほか出版紹介

野﨑郁雄「日々」　H28・8
白井重之「谷と村の行程」　H28・9
俳人協会自註句集「中坪達哉集」　H28・11

平成二十九年度 夏季吟行会（予定）

とき　七月十六日（日）
ところ　朝日町コミュニティーホール・アゼリア
講師　富山県俳句連盟　理事
「森」主宰　森野　稔　先生

講演要旨

山・人・自然

―越中の風土に学ぶ―

県ナチュラリスト協会参与
立山散策案内人　佐伯成司

昭和十八年に九州小倉で生まれる。父の転勤により山科へ移る。小学校に入学に当り、父の故郷座主坊新村の叔父宅に預けられる。

そこは十二戸ばかりの寒村で電灯もないが、遊ぶには何不自由のない快適な栖。岩峅小学校には片道三㎞を歩く、担任は大野静枝先生。後年村に電灯を発電機から引いたのは、上滝中学校の高木義範先生である事を知る。

父の帰郷で大泉に移り堀川小二年に転入。一家九人が揃うも次年正月七日に父死去す。担任の森敏道先生の遠足では千寿ケ原から称名滝を往復する。学校から帰ると薪割りと竈で米を炊くのが日課。遊び場は本泉神社と広田用水、周辺の田圃と変化する。

高卒後は南田町の会社勤め。しかし、帰巣本能から岩峅小跡近くに居を移し、勤めも美女平駅の臨時職員と転職する。これが私の人生の転機となり、いまに係わることとなる。

立山開発鉄道の営業範囲は、立山駅から美女平駅間の立山ケーブル、室堂までの立山高原バス、及び美女平ホテル、弥陀ケ原ホテル。また、冬期は極楽坂ホテル、セントラルパークレストラン、粟巣野ホテルである。駅の勤務三年の後、美女平ホテルに移って正社員となる。冬期は粟巣野ホテルへ。このホテル勤務が第二の転機。岩田進支配人と松岸得之助氏等と出合い、美女平の森の魅力を知る。

美女平ホテル周辺のブナ、立山杉の森で遊び、歩くスキー散策などを楽しむ。富山県野鳥保護の会の面々と出合う。熊木信男、日出嶋哲夫、高野伸二、折谷隆志等の各氏。美女平ホテルの客室には村嶋西一、斉藤清策、豊秋半次、篁牛人、大平山涛、荻原井泉水。相馬御風などの書画が床間に掛けられ、昭和天皇、皇后両陛下の休まれた二〇三号室があった。「食堂の窓から　オオアカゲラの巣穴の見えるホテルなんて　何とすてきなのでしょう」高野伸二　昭和五十七年四月十九日。

富山保育専門学院の宿泊学習は六月中旬の梅雨に催行された。美女平の森で森林浴、探鳥を楽しみ、弥陀ケ原周辺を歩くスキー散策でホテルに泊り、翌日は天狗平から雪の大谷を歩いてまだ閉鎖中の雄山神社を参拝して立山高原ホテル泊り、翌々日は黒部ダム左岸の散策または称名滝へ。六月は初夏、春、冬を体験できる季節。松岸得之助氏の提案。本折アヤ子、麦谷直子先生の指導。ガイドは佐伯成司と私。

富山県置県百年イベントでは、いきいき富山観光キャンペーン実施協議会の岩田進事務局長の企画で、美女平の森林浴、弥陀ケ原、室堂平でのX・Cスキーなどの案内。その後、これらは山と渓谷社主催で立山登山学校の各教室に引継がれ、現在はホテル立山でのイベントにつながる。ここでの出合いは、写真家横山宏、近藤辰郎、柳木昭信、スキーでは小泉哲也、杉原整。また粟巣野スキー場での歩くスキー教室を催し、石田淳富山市助役、高岡短期大学倉田久敬教授、蠟山昌一学長と出合う。

美女平～ブナ坂～刈安谷

愛山荘は佐藤助九郎号助庵の別荘。昭和三十二年に高松宮御宿泊。愛鳥荘は北日本放送の横山四郎右衛門号白門。昭和三十二年に中西悟堂、八重子夫妻、星野嘉助が訪れ、下山喜太郎が同行しガイド佐伯利雄が立山案内。定本野鳥記『雪表』に載る。殿下杉は秩父宮の御休憩地。慎有恒、中野峻陽等が同行。立山杉を調査したのは吉澤庄作、昭和二年の事「最も寒心に堪へざりしは、立山参道を中心として、其両側の地に於て植林を試みしことなり」と記す。吉澤は中尾哲雄氏の俳句の先生と近年知る。大観台で昭和天皇に進講した深井三郎、進野久五郎、興味を示されたのがミズバショウとタニウツギと浅井なみ子より聞く。

戦前に建てられたブナ小屋は廃屋となっているが、春山スキーの基地であった。経営に携わった佐伯間左衛門、守父子、杉田三江子と宇治長次郎の事や滝見台の荻原井泉水の句碑「滝をおとし全山木の葉をおとしおわり」等。

弘法平～追分～美松坂～天狗平

八郎坂を登り切った所に滝見小屋があった。佐伯兵次、満寿男父子の経営。現在は雷鳥沢ヒュッテを満寿男、寿一郎父子が経営。

弘法小屋は現在休憩ベンチ広場となる。志鷹美則、トシエ夫妻の経営。まだ無名の荒谷直之介画伯はここでスケッチ三昧。志鷹家には弘法小屋を描いた一枚を遺す。弥陀ケ原ホテルに向う雪上車の高松宮一行が立寄られ、弘法の清水でのお茶でもてなす。今その清水井戸は、井桁を組んで復元されている。

「弘法小屋ほろびし跡にほうほうと茂るすすきのひと叢そよぐ」昭五十一年詠、岡野弘彦。

追分小屋は志鷹新正、静代夫妻の経営。ここを定宿にしたのが神戸六甲学院。武宮隼人先生の事。関西学院ヒュッテと佐伯平蔵（二代）の事。美松荘と立山高原ホテルの事。松尾峠の三角点と新田次郎、佐伯文蔵の事。天狗平の石仏と京田良志先生の事。片岡球子さんと剱岳の事。水原秋桜子、春郎の事。

冬期ライチョウ調査のこと

富山市中野の横田病院内に立山連峰の自然を守る会、富山雷鳥研究会の事務局があった。植木忠夫、広瀬誠、折谷隆志、佐伯富男の各理事と共に会合。事務局の横田力院長さんはいつも裏方に徹しておられた。冬期ライチョウ調査に東京農大北原正宣先生、佐伯富男氏等と共に入山したのが職を辞すきっかけとなる。フリーとなって雷鳥生息数調査に係わる。

清流荘の佐伯金蔵主人と子息学さんと共に客提供用の山菜取りに同行して、有峰仙人とされる種村留吉に出合う。憧れの人であった。

ＴＶ東京「立山登拝の道」の取材で、十三日間にわたり志垣太郎を案内。この番組が、富山県護国神社主催「元服立山登拝」に結びつく。これまでの体験談は岩峅寺雄山神社の佐伯静夫宮司さんからの依頼で、社報『いわさか』の「立山の四季を歩く」シリーズに連載している。私は今、弥陀ケ原ホテルをベースに散策案内し、立山の四季に遊ぶ。

俳人協会富山県支部 俳句大会

九月二十二日(木)、富山電気ビルにて開催。俳人協会幹事「雲の峰」主宰、朝妻力氏を講師に講演を聞く。演題は「お水取を三倍楽しむ二月堂修二会裏話」。参加者八十三名で三句投句。

講師特選

子を五人育て上げたる日傘かな　荒田眞智子
よく走るミシンの音や小鳥くる　野村美智子
新藁に猫裏返る日和かな　杉本　恵子
すれ違ふ木地師に木の香涼新た　脇坂瑠美子
段丘の町に厄日の日暮待つ　成重佐伊子

☆互選高点句

一　位
よく走るミシンの音や小鳥くる　野村美智子

二　位
萩咲くやこの頃母に手を貸して　野中多佳子

三　位
田の神に一穂置きある刈田かな　谷　雅夫

俳人協会主催、全国俳句大会ジュニアの部、小学校部門
学校賞　高岡市立伏木小学校

消　息

平成二十七年度第三十回全国高等学校文芸コンクールに続き平成二十八年度三十一回同コンクールの俳句審査員を中坪達哉県俳句連盟会長に委属。

尚、平成二十八年度第十八回北信越高校生文芸道場、富山大会の俳句部門の講師、第十六回富山県高等学校文芸作品展の俳句の選者に川井城子県俳句連盟幹事が務めた。

俳人協会創立五十五周年記念・北陸俳句大会

七月十日（日）金沢東急ホテルにて開催。講師、茨木和生　演題「季語に生きる」

大会募集句　準大会賞
田水張り棚田千枚立ち上がる　脇坂琉美子
廃校にのこる土俵や鳥雲に　杉本　恵子
背伸びして物干す風や柿若葉　民谷ふみ子
また伸びてをる仏壇のチューリップ　室井千鶴子

南砺市交流俳句会

七月十八日（月）南砺市院林、常願寺にて開催。参加者二十七名。

城端俳句協会虫干法会俳句会

七月二十三日（土）を善徳寺、会議室にて開催。参加者二十五名。

ホトトギス北信越俳句大会

九月二十四日・二十五日の両日ホテル森の風立山にて、北信越五県他関東、関西他より百二十名参集し開催。立山室堂周辺、閻魔堂、布橋等を吟行。

稲畑汀子特選

さりげなく庭の草活け月を待つ　寺島　晧

辛夷年次大会

十月九日（日）富山電気ビルにて開催。平成二十八年度　衆山皆響賞　杉本　恵子
秀嶺賞　小澤　美子
大会句天位
星合を行き交ふ明り新幹線　民谷ふみ子

第44回　砺波市文化祭俳句大会

十月十五日（土）砺波市文化会館にて開催。投句二五二句。投句者八十四名。

中坪達哉県俳連会長　選

天　位
悪させぬ鳥も翔たせて大根蒔く　野村　邦翠
地　位
新米の名前聞きては又忘る　田村　浩美
抱き起こす白萩の露かぶりけり　沖田　泰子
人　位
散居野の一枚となり稲実る　砂田　春汀
生身魂今日もニコニコ在します　寺　沙千子
仮住まい西瓜とともに納屋に居り　西田満寿子

中村宗承県俳連理事　選

天　位
新涼のきりりと巻きし岩田帯　田村　浩美
地　位
市街地の団地の狭間稲匂ふ　大谷こうき
人が好き夕焼が好き赤とんぼ　堺井　洋子
人　位
溺れさうにをんな稗抜く穂波中　二俣れい子
盆の月八十路の口に紅つけて　松浦寿美子
母の掌に目のあるごとく菜を間引く　野村　邦翠

第35回　芭蕉まつり俳句大会

十月三十日（日）小矢部市石動公民館にて開催。投句一般五八句。小中学生八六句。優秀句を表彰。

地　位　沼田節子

第十九回にゅうぜん　扇状地俳句大会

十一月十三日（日）入善町民会館にて開催。投句数、一般八〇句。ジュニア一、四四一句。秀作を表彰し、野坂千佳子、船平隆子、広川光信、高村寿山各氏が選評した。

天　位
朝寒や母の茶碗の伏せしまま　清田　克司
地　位
返り花余白少なき母の文　西島　教子
人　位
夢に会う母は夜なべの縫織る　建部　春美
とんぼうも過疎となりたり扇状地　中塚　敏明
雲は秋去りゆくものの音もなし　清田　圭二

氷見市民俳句大会

十一月二十日（日）氷見市中央公民館にて開催。講師、中坪達哉県俳連会長。

講師特選

行きずりの猫を呼び込む日向ぼこ　宮西　昌子
柿干して山家の庇傾けり　杉本　恵子
蹲いて身を立てなおす秋の昼　広田　道子
集い来て仏具みがきや時雨くる　粂　千鶴子
獣の糞まだ新しく神の留守　林　紀男

編　集　後　記

連盟会報83号をここにお届け致します。次回は平成二十九年七月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば、**原稿用紙**に記入の上、左記に送付下さい。（郵送又はＦＡＸのみ）

〒九三九―一八一一　南砺市理休二二六
川　井　城　子
ＦＡＸ・ＴＥＬ(〇七六三)六二―一三〇八